愛知教育大学教育実践総合センター紀要
第12号，pp. 95～ 98（February，2009）

ドルトによる子どもの新しい教育（V）

山　中　哲　夫（愛知教育大学外国語教育講座）

La nouvelle éducation de l'enfant selon Dolto（V）

Tetsuo YAMANAKA （Department of Foreign Language, Aichi University of Education）

要約　スキンシップには常に言語を介在させること。母親の言葉は赤ん坊に対象の意味付けをする／体罰は決して行ってはいけない。身体にあたえられた強烈な刺激は子どもには性的快感になる。その快感を得ようとして身体的苦痛を受けるような行為をあえて行うようになる／子どもを辱めることはその子どもの精神的「父」を殺すこと／赤ん坊は自分でミルクの濃さを調節する／性教育における母親の役割の重要性。女性性器はペニスの欠損。人形遊びがその代償行為となる。

Keywords：言語，体罰，マゾヒズム，倒錯，口唇期

スキンシップと言語

子どもにとってスキンシップは重要なことと言われているが，スキンシップは重要だから行うのではないとドルトははっきり言っている(1)。小児科医から勧められたからそうするのではなく，母親は実際に子どもを抱きしめたいし，子どもは母親から抱かれたがっているのである。つまりスキンシップというのは自然な行動なのである。医師の指示によってスキンシップを行うのは，まるで《子どもに愛撫という薬を「投与」しているようなもの》(2)ということになるだろう。愛撫によって愛を子どもに伝えること，子どもがそれを要求することは，もともと自然なものなのである。身体を通じて子どもとコミュニケーションをはかるという意味ではスキンシップはひとつの立派な言語と言える。この身体言語（langage corporel）はまた同時に本来の言語を伴って伝えられるべきである。犬や猫を愛撫しているわけではないのだから。ドルトは言う，母親は小猿の蚤を取ってやる母猿ではない，母親は愛撫しながら，子どもに声をかけてやり，歌を歌ってやる存在である，と。これはスキンシップの「人間化」にほかならない。このことによってスキンシップに別の意味が与えられる。それによって子どもは成長するのである。

しかし例えば，子どもが言葉を半分しか理解できないほど幼くても，言葉は重要なものなのか，起こった出来事や親の決定したことを子どもに説明してやることは重要なことか，という質問にたいして，ドルトは《必要不可欠なこと》と答えている(3)。子どもに関わることを本人に説明してやることは必須のことで，たとえどんなに子どもが幼くても，子どもには話してやるべきであると言っている。これはとても大切なことのように思われる。なぜなら，わが国では子どもに関わることであるにもかかわらず，本人に知らされないまま事が進められる傾向にあるからである。子どもに心配をかけるようなことは話してはならないが，結論は語って聞かせるべきである。「子どもは半分も理解していない」というのは大人の側の間違いである。子どもは《すべてを理解している》のである。

子どもには彼の身に起ることを語ってやるべきである。例えば，ある人に預けるときには，“誰某さんに二，三日あなたを預けるわよ。あなたは預けられるのよ。私にはやるべきことがあるから。でもすぐに迎えにくるわ”と説明してやり，“哺乳ビンを置いて行くわよ”と付け加える。空腹のとき，子どもが哺乳ビンをくわえ，二,三度これをくり返すうちに，“哺乳ビン”（ton biberon）という言葉がはじめて意味を持つようになる(4)。つまりその言葉によって母親が現前するわけである。その言葉はその意味を知る以前から子どもは母親から聞かされていた。実際に起こった出来事によって，子どもはあとからその意味を知り，言葉で聞かされていたことの正しさを認識するのである。このようにして親と子どもの信頼関係が築かれてゆくのである。

体罰の功罪

体罰についてドルトはきわめて明確な態度を示している。体罰は何が何でも避けるべきであると彼女は断言する。彼女はロシア人の夫の言葉を引用している

が，それによると，戦前のロシアでは，子どもを叩く大人は（酔っ払っていてさえ）皆無であった，子どもを叩いているところを見たことがない，子どもを叩かないのが大人の信条であって，それは子どもが精霊の宿る神聖な場所であるからだ，というのである。戦後，ロシアでも子どもを叩く親が増えて，彼は心を痛めているそうである。《こうした親には人間にたいする尊重の情がない，子どもにもそれを教えることができなくなった》と彼は嘆いている(5)。彼の意見は正しかった，その通りになったとドルトは注釈している。

深く心にとどめておくべきこと ── 子どもの躾は犬や猫の躾とは違うということである。子どもにあたえる身体的暴力は躾とは何の関係もないということ，これは肝に銘じておくべきことである。動物の親は子に身体的苦痛をあたえて育てる。それは動物には言葉がないからである。人間はもちろん動物とは違う。ところが往々にして親は子どもの尻を叩く。これは親のリビドーの抑圧の表われに他ならない。カッとなっているのがその証しで，それは教育ではない。子どもに手を上げたなら，即座に謝ることだとドルトは言っている。“私が悪かった，カッとなってしまった”それでもどうしても暴力を振おうとする親がいる。そんな親にたいするドルトの助言 ── 《手にクッションを持って，それを叩きながら子どもに言いなさい，“あなたがそんなことをするから，本当はあなたをこうしてやりたいの”》(6)このようにすれば母子関係は改善されると言っている。実際多くのケースで現実にあったことである。なぜ改善されたか。このようにすれば，子どもは客観的に，冷静に，問題となっていることが理解できるからである。実際に子どもがぶたれると，何も理解できなくなる。理解できなくなる以上に，さらに悪いことには，母親からぶたれることに快感を覚えるようになる。幼い子どもには激しい感覚はたとえそれが苦痛であっても快感として伝わる。一種のエロス化である。平手打ちを食らうと，子どもは自分が辱められたと感じ，マゾヒズムの中に逃げ込む。尻を叩かれると，性器的感覚が身につき，オルガスムを感じるようになる。

子どもは大人のような性感帯は持っていないが，その代わり，強烈な感覚はすべて性的快感となる。したがって，叩かれてきた子どもは，今度は新たに叩かれることを求めて，そのようなことを自ら進んで行うようになる。いわば悪循環に陥るわけである。子どもは故意に（あるいは無意識裡に）母親を怒らせようとする。母親は我慢しなければならない。そのようなときにはこう言いなさいと，ドルトはアドヴァイスしている ── “あなたは私からお尻を叩かれたがっているのね。でも，あなたのお尻を叩きはしないわ。あなたは動物じゃないから。あなたは私の息子よ”

子どもを辱めること

親は簡単に子どもを辱めたり馬鹿にしたりする。それは子どもにとって恐ろしいことである。まるで自分には両親がいなくて，孤児になったように子どもには感じられるからである。彼は sécurité のすべてを失う。無意識の世界では，親から辱められると，子どもは自分の心の中で，「父」が殺されたかのように思う。子どもの心の中には父親（あるいは父親的ななにものか）が存在しているが，子どもが辱められると，この「父親」が辱められる。現実の父親によって辱められると，自ら自分の価値を貶める父親を持っていることを，子どもは恥と思うようになる。親が子どもを馬鹿にするのはノーマルなことではないとドルトは言っている。したがって，“うちの馬鹿息子”“うちの馬鹿娘”と親が子どもを呼べば，子どもにきわめて悪い影響をあたえることになる。子どもは神経症になるか，劣等感を抱くようになる。家族の神経症の犠牲者となる。

逆に皆の前で子どもを自慢げに見せびらかすのも悪いことだとドルトは言っている。皆の前で子どもを褒めそやすのは，じつは子どもを辱めていることに他ならないのである。つまり，母親が皆の前で，父親には能力がないことを暴露し，代わりに子どもを使って皆を感心させているわけで，子どもはそのことによって父親の無能力を思い知るのである。こういった行為は，子どもが両親に取って代わって行う児童買春のようなものだ，とさえドルトは言っている(7)。

子どもは学校の先生から罵られたり，馬鹿にされたりといったように，他の大人から辱められることもある。子どもが親以外の大人から辱められた場合，それは誰彼の子どもとして辱められているのである。そういうとき，子どもには次のように言ってやるほうがよいとドルトは助言している── “その人がそんなことを言ったのは，ママがきれいだから，ママが成功しているから，やきもちを焼いてそう言ったのよ”辱めた大人の面前でそう言ってやることはもっとよいことだ，というわけである(8)。

子どもには本当のこと，あるがままのことを言うべきである。すべての大人が，親切で思いやりがあるとはかぎらない。大人の人間性について嘘を言ったり，誤った幻想を抱かせないことが大切である。子どもが大人と結ぶ人間関係において，相手の大人のことで安易に希望を抱かせないことである。小学校の担任の先生とうまくいかない場合も同様である。相手の先生が子どものことをよく思っていないことを認めたうえで，子どもに自分にできる最良の努力をして，先生をあっと言わせるように勧めたり，クラスを替わりたい子どもの気持を認めたうえで，もう少し我慢して進級できるように勧め励ますことが大事である。

本当のことを子どもに言うべきだと，あまり強く主張しすぎているのではないか，という疑問にたいして，ドルトは次のように答えている。真実というのはトランポリンのようなもので，子どもにとっては人生を突き進めるためのものであり，またてこの支点でもあって，現実にぶち当たったときの支えとして機能するものだ，と。誰かを罵ったり，起きそうもないことを言って子どもを困らせてはいけない。逆に子どもの経験を大事にして，その経験に言葉を与えて，子どもが間違いを犯していなかったことを確信させるべきである。例えば自分は母親から愛されていない，あるいは望んだようには愛されていない，あるいは兄弟姉妹よりも自分は愛されていない，と子どもがそう信じたと仮定して，もしそれが真実であれば，それを否定しないことだとドルトは言っている。そういう状況からプラスになるものを引き出させるように，子どもを支えてやらなければならないのである。

嘘を言うよりはましであって，ごまかしてはいけないのである。子どもには，早く真実の壁にぶち当たる必要がある。そういう困難な状況を自分で切り開いていけるように仕向けることが大切である。こうあってほしいとむなしい希望を子どもに抱かせつづけるよりは，あるがままの現実を直視するほうが子どもにはよいことなのである。

倒錯ということ

泣いている子どもは泣くという行為で自己表現をしている。体に触れなくても話しかけるだけで子どもは泣き止むことがある。それは自分に関心を持ってくれていることを子どもが感じ取るからである。ところが話しかけずにおっぱいを口に含ませることで泣き止ませようとすると，「倒錯」が生じる（ドルトはこの言葉をかなり広い意味で使っている）。自分はいつも困ったときにはおっぱいの代替物を手に入れることができるのだ，と子どもは信じ込むようになる。これが後の人生において，麻薬やアルコールになるのである。こういう場合，親は無意識裡に子どもに次のようなことを教え込んでいるのである。つまり，不幸なとき，つらいときに不平不満を言ってはいけない，食べ物や飲み物，フェティッシュな対象で口をふさぐべきだ，と。これが「倒錯」というもので，成長と正反対のものである。ドルトは哺乳類の例をあげて次のように指摘している。哺乳類は末梢神経が完成すると，すぐに禁欲的になる。つまり排泄排尿をコントロールできるようになる。動物においては生後数日でそうなるが，人間は時間がかかる。肛門期の粘土遊び，泥んこ遊びが重要なのはこのことと関係しているからである。肛門の快感と手の快感は連動しているので，肛門期の子どもには十分にこの遊びをさせるべきである。そして肛門期に厳しく躾けることは子どもを倒錯させる(9)。

倒錯した教育とは，子どものため，子どもの将来のためではなく，親自身のために行われる教育のことである。子どもが親の気に入ろうとすることは健全なことではない。なぜなら，親の気に入ろうとすることに子どもは快感を感じているからである。子どもは親から離れ，家族から離れ，自己の基盤や自己の家族を作っていかなければならない。“汝，汝の親を尊べ”――この戒律には大きな真実が含まれている。親は敬うべき存在である。しかし“汝の親を愛せよ”と言ってはいけない。なぜなら，親は子どもから愛されるために存在しているのではないからである。親は子どもの健全な，調和ある成長を可能にするために存在しているのである。子どもは親を愛すべきではないというのではない。子どもが親を愛しているなら，それに越したことはない。しかし，人間は閉ざされた狭い環の中で互いに癒着し合うために作られたのではない。人間は互いに連帯意識を深め合いながら進歩するために作られたのである。

一言で言えば，子どもの進歩，発展，成長の方向へ向わないもの，それが「倒錯」である。すなわち倒錯とは退化，退行，過去へ向うものなのである。私見では，現代の若者による犯罪のほとんどすべてが，この「倒錯」によって起こっている。

子どもというもの

子どもについての一般論は困難で，「子どもというもの」という表現は不適当であって，個々のケースしか存在しない。それぞれのケースにおいて，子どもの性質，育った環境，その子特有の可能性をよく見きわめる必要がある。しかしそれでも，心の問題について，一般的な教訓が可能だとドルトは言っている。つまり，子どもにたいしてどのような心構えで接したらよいかということについて，一般的な法則があると彼女は言うのである。

子どもの生命力やヴァイタリティは大人が考える以上に強烈なもので，どんな子どもでも自己を表現したいという欲求がある。この自己表現の欲求を阻害しないことが大切だとドルトは指摘している。これは大変重要な指摘だと思われる。夜泣きする，物を壊す，おっぱいをほしがる，抱っこをせがむ，叫ぶ，噛みつく等々。これらはすべて自己を表現したいという欲求を示すものである。これを強制的に抑えつけようとしてはいけない。あるがまま，子どもに自由に自己を表現させてあげることが大事である。子どもが健全に育つためにはそうしなければならない。

では，子どもの失敗や拒否といったネガティヴな振

舞いにたいしては，どのようにポジティヴな意味をあたえたらよいのか。０歳児から２歳児の場合，子どもは片言によって，ゆりかごの中の遊びによって自己表現をし，また危ない冒険をする。しかしさせておくことが重要である。親はえてして，子どもを危険な目に合わせまいとして，安全な状態に子どもを置く傾向にある。ここでドルトは18ヶ月の赤ん坊の例をあげている。母親の帰宅が少し遅れる。授乳の時間がわずかに遅れる。子どもは泣き叫び，暴れまわる。哺乳壜を差し出しても拒否する。どうしたらよいか？ドルトによれば簡単なことで，子どもを泣きたいだけ泣かせておくことだそうだ。嫌がる哺乳壜を無理に押しつけないことが大切で，授乳を嫌がる時期でもあるからである。赤ん坊は「大人の食べ物」を欲しがる。授乳を停止しても健康上重大な結果にはならない。母親の苛立ちこそが悪影響を与える。ここにカウンセラーの誤った指導が入り込む。すなわち《子どもに自由に哺乳壜を拒否させておくと，あなたはもう子どもを支配することができなくなり，代わりに子どもがあなたを支配するようになりますよ。》つまり子どもがわがままになるというわけである。しかし現実には決してそうならない。

無理やりに哺乳壜を押しつけるとどうなるか。子どもは窒息感を覚える。それによって出産時のトロマチスムが再現される。この再現によって子どもは退行する。つまり胎児段階へ逆行するのである。いまよりももっと小さな時期へ退行し，母親の保護が必要になってくる。授乳は拒否しなくなるが発育不全に陥る。

口唇期は泣き叫ぶ時期であり，自己表現が困難な時期である。泣き叫ぶことによってのみ，自己の情動的緊張を放出する。つまり自己を鎮めるために泣き叫び，そうやって緊張から解放されたがっているのである。赤ん坊は泣き叫んだあと，ミルクをがぶ飲みする。泣き叫ぶこととミルクをがぶ飲みすることは同時にはできない。したがって，泣き叫びたいだけ叫ばせておくことが必要である。《Non》と言いたいだけ言わせておけば，やがて《Oui》と言うようになるのである。これが，子どもの拒否の態度にポジティブな意味を与えるということである。

ミルクについてドルトは面白い実験をしている。赤ん坊は自分で自分に適したミルクを選ぶというのである。水で薄めた何本かのミルクの入った哺乳壜を並べておく。赤ん坊は濃いミルクからはじめて，やがて薄いミルクへと移っていって，自分で自分に適した濃さに調節するのである。酷暑の日には，一番薄いミルクさえ拒否し，純粋に水だけを要求する。数日間水だけ飲んだあと，体が栄養を要求するようになると，ミルクへと移る。

赤ん坊がゆりかごの中でばたついたり，泣いたりしているのは，自分のところに来てもらいたい，自分を理解して欲しいと願っているからである。赤ん坊が一人でゆりかごの中でおとなしくしているとする。そこへ母親が見に来る。そして母親が去る。赤ん坊は泣く。母親の姿を見ていないときには泣いていなかったのに。これはどういうことなのだろう。ドルトによれば，母親の到来が《onde de rupture》（断絶の波）を作り出し，赤ん坊に涙を流させたのである。俗な言葉で言えば「逢うは別れのはじめ」ということになるであろうか。赤ん坊は遠くから見守っておくべきである。別離の悲しみを与えないために。私見によれば，こういう態度は思春期の子どもにたいしても当てはまるのではないだろうか。親の存在を常に意識させ，しかし決して介入しない，という態度が必要なのではないだろうか。

性器について

子どもは裸が好きで，いわば子どもは本来的に裸体の存在と言えるだろう。親（特に母親）の心配は，子どもの性器についての関心である。子どもの性器への関心は，自分の鼻や耳への関心と同じものである。大人へ質問するということは，この部分への興味が目覚めたしるしに他ならない。心に思っていることを，大人から言葉で言ってもらいたいのである。これは性への目覚めの第一歩で，そのさい母親の態度が重要である。子どもの質問にたいして正確に，何気なく話してやることが大切である。例えば，おしっこをするところ，男の子（女の子）の大事なところというように。ドルトはフロイトの理論にしたがって，女の子にとっての性器はしばしば“blessure d'amour-propre”（自尊心の傷痕）となると述べている。つまりペニスが欠損したと考えるのである。この欠損から不安が生じる。またそこから異性の性器への讃美や羨望が生まれる。そういうとき母親は次のように言うべきだとドルトは勧めている ――“ないのはとても残念なこと，でも事実だから仕方がないのよ”人形へ興味を示しはじめると，この欠損の不安はなくなると言われている。つまり人形への興味というのは去勢コンプレックスの代償に他ならないのである。

註

(1) Françoise Dolto, *Les étapes majeures de l'enfance,* Gallimard, 1994, p.55.
(2) Ibid.
(3) Ibid.
(4) id., p.56
(5) Ibid.
(6) id., p.57.
(7) id., p.57.
(8) Ibid.
(9) id.,p.61.